

令和6年度 学校評価報告書

	視点	4 年間の目標 (令和6年度策定)	1 年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価（3月28日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①インクルーシブ教育実践推進校としての取組を軸として、授業のユニバーサルデザイン化を推進する。 ②組織的な授業改善を重ねることで、生徒の学習意欲を喚起し、基礎学力の定着を図るとともに、「自ら学び続ける生徒」を育てる。	①すべての生徒を対象としたユニバーサルデザインの視点での授業を研究及び実践する。 ② 継続的な授業改善や一人一台端末の活用方法について、教員間での情報共有を行うなど、生徒の学力向上を推進する。	①授業に参加した生徒全員が、理解を深めることができるように組織的な授業研究を行う。 ②一人一台端末の有効活用、アクティブラーニング型授業の工夫など、生徒の意欲を喚起し、学力向上をめざした授業づくりを推進する。	①年間を通して、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を見直し、改善することができたか。 ②端末の活用状況を含め、教科横断的に授業見学を2回以上行い、授業研究会を通して授業の最適化を図ることができたか。	①定期テストや実習、授業レポート等の評価を各教科・科目内で共有するなど、インクルーシブの視点も取り入れたが、単元や内容により実施が難しい場合が散見された。他校の様々な取組を学び、取り入れていきたい。 ②各教科内での授業改善は日々進捗しているが、他教科から得られる知見も考えられるため、教科横断的な取組を計画・実施していく。	①ワークシートを学年で統一する、授業の目標を明示することにより、成績管理を行うことができ、授業後の振り返りの活性化にもつながったことから、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を見直しするなど改善ができたとして評価する。 ②端末を用いての小テスト実施や実技科目において検索動画の共有や閲覧することで、主体的に学習する意欲の向上がみられた点で、授業の最適化を図ることができたと評価する。	①定期テストや実習、授業レポート等の評価を各教科・科目内で共有することにより、成績管理を行うことができ、授業後の振り返りの活性化にもつながったことから、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を見直しするなど改善ができたとして評価する。 ②教材研究を進め、端末がどのように利用できるか研究を進めている。その成果として、生徒が主体的に学ぶ姿勢が多く参られてきている。すべての教科・科目での活用も課題となる。	①ユニバーサルデザインの視点をもってインクルーシブ教育をさらに充実させていく必要がある。インクルーシブの視点で教科指導を実施する際に見られた課題の解決に向けて、学校全体での検討や他校の情報を参考にするなど組織的な改善をしていく。 ②一人一台端末の利活用が進んでいるが、より多くの教科、科目で授業改善と連動するように研究を進める必要がある。校内において、より効果的な活用方法を実践するため、他校の報告を参考にしたり、研修会等に参加したりする必要性がある。	
2	生徒指導・支援	①「生徒支援」の観点から、安全・安心な学校生活を保障する。また、教育相談体制を充実させ、生徒のサポートを徹底する。 ②自己表現・自己実現ができる豊かな人間性を育むため、学校生活の中で生徒が活躍し、成功体験を積む機会を設定する。	①生徒の安心安全な学校生活に資するため、一人ひとりの生徒に寄り添い、組織的に支援する。 ②学校行事や部活動等における目標や意義を示し、生徒自ら実践・振り返りを通して達成感を体感させる。	①かながわ子どもサポートドックを活用した積極的な教育相談を展開することで、学校生活に困り感のある生徒を支援につなげる。 ②自分自身の役割を自覚させることで、学校行事や部活動等で生徒自ら考え、実践する力を養う。	①かながわ子どもサポートドックの本格導入により、教育相談を充実させ、積極的な支援につなげることができたか。 ②さまざまな教育活動を通して、生徒主体の取組により意識の変容や達成感を数値により評価ができたか。	①かながわ子どもサポートドックを積極的に活用することで、面談の機会が増え、教育相談の充実を図ることができた。困り感のある生徒に対して支援につなげることができた。 ②体育祭の充実感（満足度）は86.8%の生徒が肯定的であり、文化祭の充実感は94.5%の生徒が肯定的であった。球技大会においても生徒が自主的に運営できていた。	①SC、SSW との連携が今後の課題である。生徒のサポートにおいて、専門的な知識を生かし切れていないと感じる。組織的に考えていきたい。 ②部活動を通じて達成感を体感できている生徒（部活加入率）を増やしていく。委員会活動が教員主導になりがちなので、生徒主体の活動を増やすよう改善していく。	①かながわ子どもサポートドックを積極的に活用することで、面談の機会が増え、教育相談の充実を図ることができ、生徒に対して支援につなげることができた点が評価できる。 ②体育祭の充実感は86.8%の生徒が、文化祭の充実感は94.5%の生徒は肯定的であった。また、球技大会においても生徒が自主的に運営できていた点から、教育活動を通して、生徒主体の取組により意識の変容や達成感を数値により見える化できたことも評価できる。	①かながわ子どもサポートドックの本格導入により、面談の機会が増え、教育相談の充実を図ることができた。一方では困り感のある生徒が回答に自分の気持ちを伝えているか課題もある。 ②体育祭、文化祭は多くの生徒が計画、準備、実施まで積極的にかかわり、生徒主体の行事を進めることができた。行事を通して生徒の成長も感じられ、さらに充実感を高める工夫が課題となる。	①かながわ子どもサポートドックの本格導入により生徒の困り感の解消に成果を上げている。しかし、担任、養護教諭、SCやSSW とさらに連携し、さらに合理的なものとなるよう検証や実践事例の共有など校内で組織的に進めていく必要がある。 ②学校行事や部活動等を通して生徒自ら自分自身の役割を自覚させることが必要である。一人ひとりの生徒にホームルーム活動や部活動など多くの場面で支援していく必要がある。
3	進路指導・支援	①生徒一人ひとりが自己理解を深め、職業観や勤労観を養うことで、主体的に	①さまざまな活動の機会を通して、生徒に職業観・勤労観を身に付けさせる。	①「総合的な探究の時間」を活用するなど、生徒のキャリア発達に資する支援	①本校生徒の実情に適合するキャリアプログラムを計画し、生徒に充実感を与	①年間を通じて、各学年の実情と実態を踏まえてのキャリアプログラムを実践することが	①生徒が充実感をさらに得られるようなキャリアプログラムを再考し、多様化する選抜方	①年間を通じて、各学年の実情と実態を踏まえてのキャリアプログラムを実践し、各生徒が充実感を得ることができた点が	①学年ごとに実情や実態に合わせたキャリアプログラムを実施しており、生徒の希望する進路の実現に成果を上げている。生徒の多様な進路先の対応や選	①3年間を見通したキャリアプログラムの精査や検討がさらに必要である。また、大学入試等の情報収集を進めるとともに、入学年度で異なる生徒の進路意

		自らの将来を考 える姿勢を育て る。 ②キャリア教育 の柱として、高 校卒業後の将来 設計を考えさせ る探究活動を重 視する。	② 外部教育機 関との連携及び 学習コンテンツ を活用し、自己 実現に向けた支 援を行い、生徒 に将来を展望さ せる。	② キャリアガイ ダンスや上級学 校訪問などのブ ラッシュアップ を図るとともに 、スタディサ プリの有効利用 を考える。	② 本校生徒に有 効なキャリアガイ ダンスを年３回 実施することが できたか。また 、学習コンテ ンツの最適化を 図ることができ たか。	でき、各生徒が充 実感を得ることが できた。	式へ対応できるよ うに内容を考える 必要がある。	評価できる。	抜方法への課題もある。	識や入学試験への考え方など、 的確に把握して生徒が安心して 進路を決められるよう整備す る。 ②年３回実施しているキャリア ガイダンスが、多様化する生徒 の実態に即してしているかアン ケートをもとに検証する必要が ある。学習コンテンツの活用方 法については、活用の実態を踏 まえ、生徒からの希望も踏ま え、より学習成果をあげられる ようキャリア支援グループにお いて検討していく。
4	地域等との協働	① 学校運営協 議会（コミュニ ティ・スクール）を中心に、 協働的・双方向 的な学校づくり を推進する。 ② 地域への貢 献と、地域資源 の活用を両立さ せ、「地域社会 とともに育ち・ 伸びる学校」を めざす。	①持続可能な学 校づくりをめざ し、教育活動の 情報を発信し、 本校の魅力や課 題を共有し、改 善につなげる。 ②「地域の中の 学校」として、 地域貢献活動を 充実させるとも に、教育連携を 締結している上 級学校を活用し 、生徒の資質向 上を図る。	①教育活動の成 果を発信すると ともに、外部か らの意見を聴取 し、本校の取組 をさらに充実さ せる。 ② 効果的な活動 とするため、現 行の地域貢献活 動を精査する。 また、教育連携 先を整理し、教 育人材を派遣し てもらうことで 、生徒の進路活 動に生かす。	①週１回ホーム ページの更新を 行い、最新の情 報を保護者や中 学生、地域住民 に提供すること ができたか。 ② 地域貢献活動 や授業等におけ る地域人材・資 源の活用を拡充 させることがで きたか。	①週１回ホーム ページの更新を、評 価の観点とした が、古いものの削 除と更新を関係部 署に依頼するま での活動にとど まり、定期的かつ タイムリーな更新 に取り組めなかつ た。 ②進路指導や外国 語学習で、校外の 人材を活用する場 面があったが、地 域というレベルで の取組を積極的 に行うことができ なかつた。	①週１回のホーム ページの更新がで きるよう、内容に ついて、担当者が 依頼から更新ま での流れを明確に して、ホームページ が有効に機能する 体制を構築する。 ②自治会や周辺企 業と連携し、地域 の人材やコミュニ ティ活動の情報を 収集する。その内 容を踏まえて、地 域と連携できる企 画を立案・実施す る。	①週１回ホームペ ージの更新を、評 価の観点とした が、古いものの削 除と更新を関係部 署に依頼するま での活動にとど まり、定期的かつ タイムリーな更新 に取り組めなかつ た点について、未達成 と評価する。 ②進路指導や外国語学習 で、外部人材を活用する 場面があったが、地域レ ベルでの取組を積極的 に行うことができなかった 点から地域貢献活動や授 業等における地域人材・ 資源の活用を拡充ができ ず、未達成と評価する。	①ホームページの更新につ いては、目標通りに教育活動 の取組を適切に更新ができな かつた。中学生、その保護者 や県民に対して、より新しい 情報を発信できるよう更新が 課題となった。また、ホーム ページの更新がスムーズに できる仕組みづくりも課題 となった。 ②教科指導における外部人 材の利用は見られたものの、 地域と連携した教育活動の 取組ができなかつた。課題 となった。	①教員のスキルの問題で更新 が定期的に進んでいないこと が考えられる。マニュアルの 整備や研修会を通して、誰 もがホームページを扱える ようにする。「シチズンシッ プ教育」、「人権教育」など 本校の取組についての情報 を掲載するなど内容の刷新 も検討したい。 ②学校周辺の自治会、地元企 業等との協働やボランティア 活動など、生徒が様々な場 面で参加できる場面が必要 である。教員と地域の方々の 情報交換などをする機会を 積極的に設ける必要がある。
5	学校管理 学校運営	① ユニバーサル デザインの観点 から、学校全体 を検証し、すべ ての生徒にとつ て安全・安心な 学習環境を整備 する。 ② 全職員が学 校運営上の課題 を共有すること で、事故・不祥 事防止の徹底を 図る。	① ユニバーサル デザインの観点 で学習環境の評 価・検証を行い 、生徒にとって 安心、安全な学 校づくりを推進 する。 ② 職員が自校 の課題を認識し 、改善を図るこ とで、事故・不 祥事ゼロを実現 し、協働的で働 きがいのある職 場環境をつくる。	① インクルーシ ブ教育実践推進 校として、本校 のユニバーサル デザインの観点 を確立し、生徒 の学校生活を支 援する。 ② ヒヤリハット 事例や職務上の 困り感を職員同 士が共有するな ど、コミュニケーション を大切にしたい 、風通しの良い 職場にすること をめざす。	① 教育活動に係 る環境を教職員 が常に点検し、 課題や予見でき る事象について 共有し、改善す ることができた か。 ② 各自の業務を 点検し、報告・ 連絡・相談を適 切に行い、事故 ・不祥事ゼロを 達成できたか。 また、月２回以 上事故・不祥事 防止に係る情報 を職員に提供で きたか。	①全生徒の相互理 解を促進し、安心 して学校生活を 過ごせる機会を 設けるために、複 数学年が一緒に 学ぶ相互理解学 習会を計画し、 全６回実施した 。 ②毎月職員会議、 朝の打合せにお いて不祥事防止 や事故防止に係 る資料をもとに 職員全体で共有 した。また、管 理職と教職員が 話しやすい環境 づくりを職場全 体で取り組めた。	①全校生徒が一緒 に学ぶことで緊張 感や学習の取組 への成果を感じ ることができた 。さらに、相互 理解学習の課題 を整理して学び を支援する。 ②企画会議にお ける不祥事防止 会議をはじめ、 毎月２回以上、 視点を变え、時 機逸することな く、職員へ啓発 を実施した。次 年度も事故・不 祥事ゼロをめざ していく。	①全生徒の相互理 解を促進し、安心 して学校生活を 過ごせる機会を 工夫を、相互理 解学習会を実施 するなど、教育 活動に係る環境 を教職員が常に 整備し、課題や 予見できる事象 を共有しつつ改 善が進んだ点を 踏まえ、達成で きたと評価する。 ②計画的に不祥事 防止や事故防止 に係る資料をも とに職員全体で 共有するなど職 場全体の取組や 職場環境の改善 を進めている点 から達成できたと 評価する。	①全生徒を対象に 行った相互理解 学習会では同一 のテーマで一緒 に学習する機会 を６回設けるこ とで、一般募集、 特別募集の生徒 が共通の内容を６ 回実施する中で 、他者理解や自 己表現が進み生 徒の学びが深ま った。また、相 互英海学習会の 成果となった。 ②不祥事防止研修 等を通して、日 頃から気に留め る視点を共有す ることにより、事 故・不祥事ゼロ を達成できた。事 故、不祥事の発 生は予見できない こともあること から、さらに「同 僚性」の意識を もって業務を進 めたい。	①今年度は初めての取組とし て、生徒の反応を 観察しながら実 施した。参加生 徒からのアンケ ートや聞き取り を行い、生徒の 実態を踏まえ、 学習内容や学年 の組合せなど検 討が必要である 。 ②不祥事防止や事 故防止の研修で は、経験の浅い 職員が研修講師 として担当する ことで、「自分事 」と意識できる ようにしたい。ま た、小さな工夫 、職員からのアイ デアも募りなが ら、「同僚性」を高 められる取組を 進めたい。

